

## ヨーロッパと日本(89・6・15 東京分館)

伊谷 峻一(昭24一修文甲)

私、ヨーロッパに昭和三十八(一九六三)年から15年間駐在しておりまして、住んでおりましたのは主としてドイツ、それから一部分オーストリーのウィーンに住みました。ドイツ語圏に住んでおりましたので、ヨーロッパと言いますが、私の肌感じた知識はどちらかと言えばドイツ系の所が多いので、話をしたらドイツの関連のことになると思いますが、どこ迄うまく話出来るか、まず最初は日本からヨーロッパを見た場合に、どれ位ヨーロッパをちゃんと分かっているのだろうかという面と、逆にヨーロッパから日本をどういう風に正確に理解しておるか、或はどいう風に見ておるか、この二つの辺を話してみようかと思えます。

ここにおいでの方諸先輩は、皆様非常によく色々勉強なさっているので、多分ヨーロッパといえますと、でかんしょじゃないですが、デカルトから始まって、カントだヘーゲルだ、ニーチエ・シヨペンハワーが一番浮かんで来て、音楽で言いますと、ここに雑喉君がおられますのでし

やべりにくいのですが、ドイツ音楽といえますと、バッハとかマアラーとか、ワグナーということになるんだと思うんですが、ひよっとすると私、今わざわざ省いたのは、ベートーヴェンが入らなかったか、どうしてモーツアルトが入らなかったかという様な印象をお持ちだと思うんですが、その辺を手掛りにしてお話ししますと、モーツアルトとかベートーヴェンというのはヨーロッパでも理解は、ドイツ音楽とは言わんと思うんです。モーツアルトは完全にウイーンの音楽家という事で、ベートーヴェンが生れたのはボンですけども、実際に作品を色々作ったりしたのは殆どウイーンでございますので、これはむしろウイーンをベースにした音楽家ということで、純然たるドイツの音楽家というのと、むしろバッハは非常に、いわば特異な例でして、一番典型的なドイツの音楽家というのは、ワグナーかマアラーかと思えますけれども、例えば音楽にしても、日本人の持っているドイツとかヨーロッパと、現実にヨーロッパで考えている理解とはかなり開きがあるかと、こういう風に思います。

例えばフランスと言いますと、私は余り自信がないんですが、古いですね、バルザックとか、モーパッサンとか、フローベルとかいう事になりました、その次にぼんと飛んで、恐らく戦後の実存主義、サルトルとか何とかいうことで、どうもその間の辺はですね、何かよう分からんという様なことではないかと思えます。今、丁度フランスが革命二〇〇年ということですかにぎやかにやっとなる様ですけども、日本人がフランスと言うと、たまたま今年は特にそうかと思えます

が、フランス革命が頭に來まして、後ご存知の知識っていうのは非常に断片的なと言いますか、知識ではなからうかと思えます。それでヨーロッパの三大国ですから、イギリスも、イギリスっていうことになりまして、非常によく分かっている様であつてもう一ツよく分かんのではないかと、私はそういう感じを持っておる訳ですけれども、諸先輩ですと、例えばイギリスですと、昔のホップスとかロックとかまず頭に浮かんで、ずうーと飛びまして、恐らく経済史でもおやりになつた方だと、かこいこみとか何とかという話になつて、後は恐らく有名なのはトウインビー位ですか、位まで飛んで後はゆりかごから墓場迄が出て來て、ただ英国は、所謂英国デモクラシーの源流であるから、非常にデモクラティックな国であらうという様な点を呑み込んだ様なヨーロッパのイメージが強いんじゃないかと思ふんです。

私が今から二十何年前にヨーロッパに行きまして、ドイツのイメージというのは、それこそカントであり、ヘーゲルあり、まあ私の場合はカール・マルクスであり何とかいう事であつたんで、まあ三高時代は一生懸命にヘッセを読んだりしたんですが、行ってしばらくすると、どうもドイツと言うのは本当にドイツかなあという位そういうのに縁もゆかりもない様な雰囲気が非常に強いというので驚いた訳ですが、私が持つておりましたドイツ人のイメージっていうのは、非常に勤儉、努力をする。非常にきちつと物事を考えてきちつとやる。恐らく日本の諸先輩のドイツ人に対するイメージは、今でもそういうことであらうと思ふんですけれども、どうも行って見ますと、

当時まだ日本が安からう悪からうの時代ですから、ある程度無理ないと言えば無理はないんですが、私が行きました時には、私の当時おりました会社の現地法人というのは10人位ドイツ人がおりまして、私は当時三十三歳ですから若者ですが、どうも縦から見ても横から見てもろくな者がおらないと、こんな程度の低い者が集まった国がドイツであるはずがない、と、いう位いいかげんなのが揃っておると、いいかげんと言っても難かしいですが、まずきちんとしていない、手を抜ける所は最大限に抜くと、要求する物は最大限に要求するということです。

それで私達は日本で生れ育った訳ですから、話をすれば分かると思ひ色々話しますが、何時まで話しても切りがつかないんです。それでやがて分かつて参りまして、こういう人を使うことは、議論をする事ではなしに、非常に簡単に言いますと、こういう風にやれという事を断固として指示をする事しかしようがないのではないかということで行りましたら、わりとうまいこと行くんです。——私の命令だからやらんのであればどうぞ引き取って下さいと言うと、まあ渋々みたいな顔しますがちゃんとやる。やらないと困ると思うと、ちゃんとやればやれる訳です。そういう事を第一印象としていきなり感じまして、余りドイツの印象は良くなかった訳ですが、その内に何年もおりましてこつちも年がいつてくるし、地位も上つてくるし、付き合う相手がだんだん向うの地位も上つてくるし、従つて向うの学歴も上つてくるとこういう事になるんですが、ある所から、突如非常に齒ごたえあるというのは、むしろこちらが冷汗をかく位優秀なのが相手に

出て参りまして、これはこっちの主張を、「まあ何とか分かつてえな」と、言う事では絶対イエスとは言わん。死にもものぐるいになって論理を組み立てて、相手の論理に対してちようちようはつしと対抗して、ふらふらになりながら、まあ論理的には私の方に分が有りそうだと思つと、分かつた、しようがないと、じゃやってやろうと、その辺が恐らくヨーロッパ、特にドイツの人の日本人には非常に分かりにくい、日本における限りはそのイメージとしては描けない点ではなからうかと思ひます。

と、言ひましてもドイツ人が感情的でないとかいうことではなく、非常に感情は激しい、むしろ日本人よりは感情の起伏も振幅も大きいんですけれども、そもそもヨーロッパ社会は必ず結末は論理的に出すと、一寸これは誇張がありますけれども、と言う事が確たる習慣になつておりまして、よくお話を聞きになつたと思ひますが、どつか十字路でぶつかりそうになつたら、両方から車降りて来て延々と議論しておるといふので、マンガの様な感じでよく日本で言われておるんですが、これは要するに面白おかしくやっている訳でじゃなしに、いかに自分の方が正しかったか、少なくとも51%は自分が正しかったと、相手に納得させないで終つたら自分の方が悪かつたという事を認めた事になると、こういう風な心情つていいですか、これは確たる態度がございまして、だから日本人の場合よく言われる様に、交通事故起すと「えらいすみませんでしたね」と、いう事で「まあまあ」といふ事で、まあ六・四にしましよと言ふ事になりますか、まず絶

対にそういう事ならないんです。どんとぶつかつたら最後、オール・オア・ナッシングになりまして、こつちがよければ全部お前が悪いと逆なら全部こつちが悪いという事になります。

要するにそういう社会的な規範が基本的にあるもんですから、法に対する考え方があきらかに違ふ訳なんです。日本だと交通事故位だと絶対に黒白を百％つけないで、どこかで手を打つかというのを、裁判官も恐らくやられると思います。警察官もやりますが、向うの場合は例えささいな、例えば一万円の罰金の交通事故でも、オール・オア・ナッシングをやる訳で、事故を起した人は貴方が悪いのだから一万円払っておきなさい、それで済ませるからと言っても、まず裁判所に行つても黒白を付けるといふ事になる訳です。

こういう考え方はよくドイツではジョークとして今でもよく言われていますが、お墓があつて、墓銘が書いてあつて、ドイツ語で言いますと、イツヒ・ハーベ・レヒト・ゲハプトと、書いてあるんですね、要するに私が権利があつたんだと、本人は死んでいるんですよ、どういふ事かと言いますと、例えば十字路で何も標識がない所は右側から来た車が優先権があるのです。ところが普通ですと、右側から行つて優先権があつても、左側から車が来て危なかつたら少しブレーキを踏んで当らない様にするのが常識である。そうじゃないんですね、当つたら向うが悪いんだからと行くんです。片方がうっかりしまして当つて、権利のある人が死ぬということがある訳で、死ぬ前に自分は権利があつたんだと言つたといふ事が書いてあるのです。これはジョークなんです

が非常に真実味のあるジョークです。そういう意味でドイツ人の権利意識は非常に強い訳です。

ドイツ人は、私はヨーロッパの経験で言えば、特にそれが強い、表面的に強いですけれども、恐らくヨーロッパでイギリス人と北欧の人間を別にしますと、大陸のヨーロッパ人はほぼ同じ様な気がします。ただ議論の仕方が、ドイツ人はこれでもかこれでもかといって身動き取れない所までやる。ところがイタリヤ人だと大体勝ったなあと思えば、いや勝ったのだとするという程度の差はありますけれど必ずやると思うんです。そういうことが私ヨーロッパへ行つて最初に一番感じて、最後まで日本人として15年間もおりますと大概の事はなれまして、最後までしんどいなあと思ひながら終つたのが、黒白をつけると言うで一寸ニアンスが悪いですけれども、どっちが正しいか最後まで行くという事で、私は帰つて来て暫く遊んでおりまして、それからアメリカの会社に半年おりましたが違うんですね、アメリカ人とは違います。基本的にはどこか同じ所があるんだと思いますが。運悪くと言いますか、運良くと言いますか、又ドイツの会社におることになりまして、毎日毎日大なり小なりそれをやっておるのです。

ドイツ人にとって何が一番日本で分かりにくいかという、「まあまあそのへんで」というのが絶対分からんと言うのです。だから非常に難しいのは、私が日本人の中で一番長老なんですけれども、「伊谷の考えではこのへんか」と言つて、私がこのへんだと言えはしようがないと、「お前がこのへんと言えば全然納得していけないけれどこのへんにしよう」と言う事なんです。

色々ありますけれども、ヨーロッパというのは論理で組み立てられた、社会的に言いますと権利で組み立てられた社会だという事だと思えます。それで丁度フランス革命が二〇〇年だということ、フランス革命の源が自由平等博愛で、この最後の博愛がどうして出来たか分からない。一番大事なのは自由平等だと思ふんですが、日本で自由平等と言えば皆んな一緒ということですから、ヨーロッパの自由平等は、全然皆んな一緒じゃないんですね。そんな事は期待もしてないのです。なんで平等かと言えば、第一に神の前には平等だ、これはまあ分かりますね。一ツの絶対神から見るとどれでも同じ人間でしか過ぎんということ、もう一ツは法の前には平等だと、フランスでも革命以前は、法自体がクラスによって違うという事だったと思ふんですが、革命以後は法は一ツあってこの法は、例えば大ブルジョワジーでもプロレタリアートと同じ様にアプライされると原則的にはこれが要するに平等という事です。

自由は法の前には皆平等だからその中で自分の運命は自分で選びなさいという事なんです。日本人が平等だからと言いますと、極端に言いますと、あの人が30万もらっているのに自分は20万で、平等じゃないじゃないかというのが恐らく一番プリミティブだけでも、ヨーロッパでは逆に二人いてどこか違う、片方が30万でこっちも30万円、それ自体がおかしいじゃないかと、だから平等っていうのは別に皆んな同じというのではなくて、単に神と法の前に平等であればいいんで、社会的な不平等というのが当り前といえは言い過ぎかもしれませんが、そういうのはあるもんで



あるという事なんですな。

先程英国デモクラシー、英国は階級差別、階級的な実際上の階級の違い、恐らくヨーロッパでも最大なんですな。ドイツでも戦後非常に崩れたといえますけれども、今でもご承知のフォン・何々という人が名のついている訳です。それでその人は大抵広大な土地とか持っていて非常に金持なんです。そういうのは日本人だとかおかしじやないかと。全然おかしことないんですな、というの、其の土地なりを得る権利は、昔の権利を親から相続したんだから当然であるということになりまして、それはちつとも平等に反する訳じやないという事になる訳です。だから逆に日本という所は階級差別さえ、ほぼ意識の上では少なくともないという事が言えると思います。ヨーロッパでは意識の上では少なくとも非常にたっぷりございます。私が行って個人的に経験したこと、今でもそうかは分かりませんが、例えばドイツの普通のサラリーマンの娘が、スペインのサラリーマンの息子と結婚することになったと、まったく違和感がない訳です。外国であるというの、日本では一番にくるが、関係ないんです。ところが同じドイツの中でサラリーマンの娘と、それからそういうフォン・何々の息子と結婚するというのは大事件なんです。社会階層を飛んで、階層が崩れる様な社会移動というの、非常に今でも抵抗があると思うんです。

今ドイツですとギムナジウムがありまして、昔の日本ですと旧制の高校を一年加えた位の年限で、日本の今の六・三・三制より一年長いのですけれど、それ終わりますと国家試験を受けまして、

点数がございまして、日本と逆で1点が一番いいので0点ならもつといいのですが、5点が一番悪いので、普通はその点数で、日本と同じで一時医学部が非常にはやりまして、1点台の成績取ってるのに医学部行かず馬鹿だなどという時代もあったんですが、ところが労働者の子弟、要するにワーキングクラスの子弟には加算がつくんです。ワーキングクラスの子弟が2.5なら0.5引けて2点になるというような事がある訳です。はっきり階層階級があるのを認めて、社会的に下の方の階層の人間を助けようといいますが、これは明らかに社会政策なんですね。そういうのがある訳です。一寸日本では考えられませんが、そういうのがあってドイツでは社会民主党が非常に強い訳ですが、それが当然だと思ってるんです。社会民主党がそういうのを要求するんです。我々の見方では、不平等ですけれども、不平等を前提に社会政策を立てるといふ事だと思ふんです。

その辺がヨーロッパの今いきました、一ツは論理・権利で成り立っているといふ事と、もう一ツは日本と違って社会階層はかなり明確な型で依然として存在している。それが前提で国の社会政策を組んでちゃんと立てられるという様な地域っていいですか、だ、という事なんです。

次にドイツは我々の学生時代は、例えば日本からお医者さんであるとか、機械工学をやる人とか皆行って、ドイツは非常に優秀な技術の先進国、テクノロジーの先進国だと勉強されて、私達の子供の頃には博士でドイツに行った事ない人は、ドイツに行っていないからだめだとかいふ様に

ドイツはたいそうな所だったんだと思うんですが、戦後のドイツは依然としての機械工学で言いますか、精密機械とか、昔のイゲ・ファルベンの流れをくむ化学は生き残って今でも非常に強いらしいですが、やはり所謂ハイテクというエレクトロニクスとか、化学でもバイオとかそっちの方になると必ずしも強くないんです。

もう一つは今ドイツの音楽であるのか、或はオーストリーの音楽ですね、音楽とか、絵画とか、所謂文化的な水準というの、戦後のドイツは必ずしも高くない。何故かと、日本では同じく敗戦で多くの町や工場が焼かれて、恐らく破壊度はドイツも日本も余り変わらないのではと思います。私が行きました一九六三年でようやく、例えばデッセルドルフは、今でこそ日本人でいっぱいですが、戦争の破壊の後は丁度かたづけいたばかり位でした。ですからそんなに日本と大きく違ったわけじゃないと思うんですが、戦後の復興はドイツは早かった。非常に奇跡の復興はありまして、経済の奇跡と、例の通貨改革がありまして、そこ迄は非常にスムーズに行ったんですが、それから経済的な強さと別に、技術的なトップ水準は余りないんです。戦後ドイツでノーベル賞取った人がいるかなあと考えないといけない位なんです。戦前だったら随分あるわけです。

(ここはオフレコで……)

皆さんもドイツを思われる時は、さっき話した古い話か、その次に飛んだらナチ時代になりまして、戦後のドイツはよく分からんという事で、私もかなり社会政策っていいですか、歴史に興

味を持ちましてドイツへ行きまして、どうしてこんなにドイツ人が戦後文化的・技術的に停滞しておるか、ヨーロッパ水準から言いますとドイツが一番強いのですが、強い弱いは別にひらめいた所がないと、色々考えて見たんですが、やっぱりナチスなんですね。皆様御存知のドイツのウーファアの映画とか、ドイツで有名なノーベル賞取った様な人間、大体ユダヤ系なんですね。アインシュタインは勿論ユダヤ系ですし、映画を作った様な人殆どユダヤ系です。ユダヤ人は私もよく分かりませんが、ユダヤという民族は何時からあの様な迫害を受けたかというのは、たどればいくらでもたどれる位ですが、そういうのは別にして、非常に優秀な民族みたいです。くずがないみたいです。そんなに沢山の人口ではないと思うのですが、それが根こそぎやられたのです。勿論、例のガスカンマーで死んだ人もいます。非常に沢山がアメリカに行ったのです。おまけに純然たるユダヤ系だけじゃなしに、東ヨーロッパの多少ともユダヤの血の入ったのまでやった訳です。

ポーランドを始めとして、あれは何十万というのを極端にいうと、上からずうとかつさらって根こそぎにするとやっぱりどうしてもレベルが落ちる思うんです。余りドイツ人相手に言わないのですが、私は恐らく戦後のドイツのハンデキャップっていうのは、ユダヤ系の人がいなくなっただということだと思ふんです。例えばアメリカで戦後テクノロジがどんと伸びたというのは、基本的な所をよく見ますと、大体ヨーロッパから、特にドイツから逃げて行った人がきびいた基

礎が非常に多い様に思えます。ドイツはわざわざのし付けてアメリカにやった様に、私は皮肉に言うど気がするんですが、そういう意味でドイツは非常に苦勞していると、特に今迄のコンベンショナルな技術から抜け出すのに苦しんだ、と思います。

しかし、最近漸く若い優秀なドイツ人が輩出して来たようで、この力は、ヨーロッパでは勿論、世界的視野で見ても技術大国になる可能性は高いと思われるます。

(メルセデス・ベントツ日本株式会社副社長)